

# 地ひびき



325号

## お、いのち

丸岡 稔

一昨年の10月10日、3泊4日の上高地、安曇野のスケッチ旅行の帰途のこと。それまでずっと運転していた私でしたが同道のTが交代しようと言い、私は助手席に移りました。私の後にはTの奥さんが坐っていました。快晴に恵まれ、3人共大満足で、あと20分程で糸魚川インターに入る地点で、うとうととしていた私は突然、巨大な

音響と共に全身に大きなショックを受けました。それが衝突事故だと思えるまで何秒とかかりませんでした。先ず「自分は生きています」と思いました。他の2人は意識不明でしたが、呼びかけには反応し、脈もすっかりしているのが確認されました。「おれは医者だ。しっ

かりしなければ」と自分に言い聞かせ、壊れた車から脱け出しました。多くの人が駆けつけてくれ、次第に状況が分かって来ました。どうやら自分達の他に怪我をした人は居ないようでした。間もなくパトカーが来て、当方の居眠り運転によることが分かりました。「誰かを巻きこんではいませんか」と聞くと「大丈夫です。相手の車は大型トラックで急ブレーキをかけてくれたおかげです。向こうは車も運転手も全く無傷です」ほっとした私に、「そうでなかったら……」と我々3人共どうなっていたか分らない。エアバックが

作動したこと、シートベルトを着けていたことで命が助かったこと

を知らされました。間もなく救急車が来て糸魚川総合病院に収容されました。3人は夫々別々に検査を受けたのですが、しつこく他の2人の安否を訊ねる私に、医師は「大丈夫ですよ」と優しく答えてくれました。気持が落ちついてくるにしたがい、胸の痛みが強くなり、深い呼吸が出来なく不安になりましたが、X線で異常ないことを知らされ、翌日から予定されていた仕事や、イベントには参加しなればと決心しました。

結局、翌日には退院し、その日だけは休診にし次の日から仕事に復帰しました。T夫妻は、その後も頭の手術やら何やらで長い入院になるのですが、夫々後遺症もなく退院出来ました。

生まれて初めての大きな事故に遭いながらもラッキーな事が重なって、助かったことが分かり、「神様、仏様が『お前にはまだやらなければならぬことがある』と助けて下さったのかも知れない」「いや、そう信じなければならぬ」と思いました。日頃、泣いたり笑ったり、時にけんかをしたり、そうした平凡な日常生活を当たり前のように思って過して来たけれど、決して当り前のことではなかったのだということ気付かせて頂いた。事故の後、しばらくそのように考えて暮らしていました。なかなか軽くない身体の痛みや、音響外傷性難聴も受け容れることが出来たのです。

2ヶ月位は「いのちが助かった」という思いで、かなり興奮気味な気持で、何事も前向きにやれたのですが、やがてその反動というか、思いもかけなかったのですが、気持が落ちこんでくることがありました。身体の特にエアバックで強打された胸の痛みと耳の不自

由さ（これは主治医から、これは治りませんと治療打ち切りを宣言されたこともあり）が気になり出しました。常に自分を叱咤しないと前向きになれない。そんなことも、新しい発見であり、何か心身にダメージを受けた時には誰にでも起り得ることなんだと気付かされました。医者として、とても大事な体験をさせられたのだと受け容れる気持になった時、再び落ちついた日常が戻って来ました。

昨年暮れに、この年最後の「地ひびき」編集にとりかかっていました。「最近、静かな語り口の快い良い作品ばかりだなあ。昔は、とげとげしい、肩肘張った作品もあったけれど、ここまで来るのにはそうした年月も必要だったんだな」とそんなことを考えながらやっています。第一回目の校正を終えた時、明け方に変な感じがし、今まで無かった不整脈に気付きました。かなり頻繁に起きるので少し気になりました。事故に遭って以来、胸や肩の痛みは続いていましたが、検査では異常なかったし、長びいているのは年のせいだろうと思っていました。或いは心臓が原因でなかったのでは？と思いついたら急に不安になりました。救急病院に行こうか？それにしてもそんなに苦しいわけでもないしと考えながら、兎も角、家人には何も言わず、午前の仕事を終えた後、私が最も信頼している循環器科のT先生を訪ねました。T先生は長く大病院に勤めていましたが、私が開業した28年前にすでに市内で専門のクリニックを開業しており、これまで心臓に問題のある患者さんは全て先生に紹介していました。受診後には詳細な情報を添えた返事を下さり、患者さんも絶大な信頼を寄せていました。私のような小さい開業医で、

しかも新しい医学知識や技術を身につけられない者にとって、このような医師間の連携は極めて大事なことです。にこやかに迎えてくれた窓口で、「今日は私が患者さんです」と告げました。

いろいろと最新の機器による検査も終って診察室に呼ばれました。T先生の笑顔で、先ずは不安の半分は消えてしまいます。昔のまま、裸の身体に温かい手を触れ、聴診器を当ててくれます。終って机の上に置かれた大きな影像装置で病状の説明が始まりました。

「丸岡先生、大丈夫ですよ。これから説明させてもらいます」と目の前に動いている心臓、カラフルな美しい影像、紛れもなく自分の心臓でありながら、まるで独立した一つの人格の如く黙々と規則正しく動いている。「ああ、これが私の？」「そうです。不整脈は心配のないのですが、先生のもそんなんです。きっと忙しかったんじゃないですか？」と言われました。「映像も凄いです。自分の心臓がこんなに、けなげに動いているのを見て感動しました」と言いつつ私は考えついたことがありました。

これを、自殺するような子供達に、自分の心臓を見せてやりたい。きっと考えが変わるに違いない。自分のいのち、決して自分だけで生きていくのではない。大きな大きな力に生かされているのだと思うに違いないと。

私の身体の痛みは少しずつ良くなり乍らも続いています。兎もすれば忘れがちなそんな気持を呼び覚ます警鐘かもしれません。

〒940-1101 長岡市沢田2-6-12